

誰が日本のお米を守つてきたのか？

ナシヨナルから家庭用の米研ぎ器が
売り出されるというニュースを聞き、
同社に製品資料の送付をお願いした。
すると、わざわざ同社炊飯器事業部の
O氏が機械を担いで当社をお訪ね下さ
った。

端々からは、お米や美味しいご飯へ寄せる思いが伝わってきた。O氏は中学卒業後松下電器に就職し、以来一筋に炊飯器事業部で仕事を続けてきて、あと数ヶ月で定年を迎えると伺った。

実演を拝見し、米研ぎ器で研いだご飯も食べてみた。研いだお米を鍋に入れ水を注ぐと少し白濁している。しかし、それはヌカではなくデンブンの流出によるものだそうで、そのまま炊いてもヌカ臭さの無い美味しいご飯が炊けた。この家庭用米研ぎ器については、

今月の「注目機・資材」覧（82頁）をお読みいただきたい。

ところで、電気炊飯器が商品化されたのは昭和28年。三洋電機が数ヶ月ナショナルに先んじたそうだ。しかし、その後ナショナルは一貫して炊飯器業界でトップシェアを維持している。さらに昭和63年、同社は電磁加熱方式の「IHジャー炊飯器」を開発。それはカマドで炊いたご飯の美味しさを実現させるものだった。同社はその特許を公開し、IH方式が現代の電気炊飯器の主流となつた。

米研ぎ器の説明を聞くうちに炊飯器の話題になつた。O氏の語る言葉の

江刺の稻

「江刺の稻」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育つた稻。全く管理されていないこの稻が、手をかけて育てた畦の内側の稻より立派な成長を見せている。「江刺の稻」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

全国の米産地の米を食べ比べながら、ひたすらに美味しいご飯の炊き方を追求してきた人々。そして、日本中の電気店や炊飯教室に出向き、美味しいご飯の炊き方を伝え続

の改良と普及が無ければ食べる人々にそれを納得させることも出来なかつたのだ。そして、ナショナルは今、家庭用米研ぎ器という商品の開発で、お米のマーケティングに強力な援護射撃を始めた。

翻つて農業界はどうか。この間の米生産・販売の当事者たる多くの農民、農林省や農協などの農業関係者たちが、米の需要拡大に対して果たしてきたことは何だろうか。せいぜい能天気な

力の結果でもあるということを、だけの農民や米関係者は自覚しているのだろうか。多くの農業関係者は、今こそ炊飯器メーカーの人々の努力と熱意から学び、その力を合わせるべきである。

もし、電気炊飯器が開発されていなかつたら、お米が主食であるという我が国の文化すら失われていたかもしない。品種改良や技術の向上で米の食味が良くなつたとしても、電気炊飯器

農業の世界でも自ら生き抜こうとする者、顧客に必要とされ選ばれていこうと努力する者なら、素晴らしい顧客がおり、また農業の外部にこそ農業者を励ましながらともに食べる人のために働くとする沢山の同伴者たちが待っているのだ。そして、農業は農民のためにではなく、食べる人のために在るのだ。

つてではない。原因は供給過剰であり、それ農業界の怠慢と国の保護に慣れ、それに依存し続けた者の弱さのためである。作るだけなら誰にでも出来、何処にでも在る米だからなのだ。

もし、これからも相も変らず政治家やお上が助けてくれるだろうと考える言いようが無い。農家や農業関係者にとって米作りは職業であり、営業であ

『米消費拡大運動』。それは、炊飯器業界の人々がお客様に美味しいご飯を食べていただくために続けてきた、営業者としての真摯な努力と情熱に比べて、どうであつたか。米価が急落していく今だからこそ、うろたえず勇氣を持つて米の消費拡大、本物のマーケティングに力を入れるべき時なのではないか。

米価の値下がりは今後さらに加速するだろう。それは外国産米の参入によつてではない。原因は供給過剰であり、農業界の怠慢と国の保護に慣れ、それに依存し続けた者の弱さのためである。作るだけなら誰にでも出来、何処にでも在る米だからなのだ。

もし、これからも相も変わらず政治家やお上が助けてくれるだらうと考える農業経営者がいるのなら、愚かとしか言いようが無い。農家や農業関係者にとって米作りは職業であり、営業であり商売ではないのか。農業はもう特別ではないのである。

農業の世界でも自ら生き抜こうとする者、顧客に必要とされ選ばれていこうと努力する者なら、素晴らしい顧客がおり、また農業の外部にこそ農業者を励ましながらともに食べる人のために働くとする沢山の同伴者たちが待っているのだ。そして、農業は農民のためにではなく、食べる人のために在るのだ。